緑内障とその予防

現在、日本には40歳以上の20人に1人、60歳以上では10～15人に1人という高い頻度で緑内障患者がいるといわれています。

緑内障のなかには自覚症状がないまま病状が進行し、最悪の場合、失明に至ってしまうものがあります。病気には気づかず、検診などで発見されることがほとんどです。

緑内障は早期に発見し、適切な治療を受けることで進行を遅らせることができます。

将来に向けて快適な日常生活をおくるためにも杉並区眼科検診を受診しましょう。

「見えにくい」「視力が落ちた」など見え方がおかしいと気づいたときには、緑内障がかなり進行してしまっていることも少なくありません。

緑内障はけっして珍しい病気ではありません。

定期的に検査を受け、早期に発見し治療を開始することが大切です。

Q&A

1 緑内障とはどんな病気ですか?

「緑内障」とは、視神経が圧迫および障害され、視野(見える範囲)が狭くなったり、部分的に見えなくなったりする病気で、通常眼圧をさげることにより進行を遅らせることができます。
視神経が弱いと眼圧が正常範囲内の人でも、緑内障が起こることがあって、これは「正常眼圧緑内障」と呼ばれています。

2 眼圧ってなんですか?

まぶたの上から眼を軽く触ると風船のような弾力があります。これは眼の中に満たされている液体(房水)が一定の圧力を保ちながら、循環しているためで、この房水による眼球内の圧力を「眼圧」といいます。

3 緑内障の診断にはどのような検査をしますか?

「眼圧測定」「眼底検査」「視野検査」などの検査をします。※

■眼圧測定には、直接眼の表面に測定器具をあてて測定する方法と、眼の表面に空気をあてて測定する方法があります。

■眼底検査は、眼の奥にある視神経と網膜の変化を見ます。眼には見たものを脳に伝えるための視神経があり、網膜の神経線維が集まって眼球外へ出て行く部分を視神経乳頭と呼びます。また乳頭にあるくぼみのことを専門用語で「視神経乳頭陥凹」と呼びます。緑内障では乳頭の陥凹が拡大したり、変形したりする変化があります。

※杉並区眼科検診では「眼圧測定」、「眼底検査」のみ行います。
眼科検診で「緑内障の疑い」と診断された場合に、精密検査で「視野検査」を行うことがあります。

加齢黄斑変性について

黄斑とは眼底の網膜の中心部分であり、物を見るために最も重要な働きをしています。加齢に伴ってこの黄斑の組織に変化が起こり、疾患に至ることがあります。例えば、ものがゆがんで見えたり、見たいものがはっきり見えなかったりする場合や、見ているものの中心が暗かったり欠けて見えない場合は、加齢黄斑変性の可能性があります。
一般的になじみの少ない目の病気ですが、最近では、社会の高齢化が進むにつれて、患者数が増えてきています。